学 位 論 文 の 要 旨

専　　攻　　社会文化学専攻

学生番号　　75428110

氏　　名　　孫　文祺　　印

1　論　文　題　目

室町水墨画における中国絵画の受容と変容
——幕府周辺の筆様制作を中心に

2　論 文 の 要 旨

本論文は、室町水墨画における中国絵画の受容と変容の様相を解明するために、主として室町幕府周辺の筆様制作によって作られた水墨画に重点を置き、日中比較の視点から述べていく。特に御用絵師たちの間で受容された幾つかの中国人画家の筆様を軸に、史料分析と作品比較を通じて、当該期水墨画制作のあり方を示し、室町水墨画の特質について解明することを主たる目的とする。

先行研究では「筆様」の意味について「図様的な概念」、「図様と筆法」、「様式」の三つの解釈が示されてきたが、定説はない。また、史料上に明記される筆様制作による現存作例と中国絵画の比較研究が乏しいため、現状では筆様による制作の実態と歴史的意義も鮮明にできていないという問題点が挙げられる。換言すれば、従来筆様制作は室町時代特有のものであったと指摘されてきたが、具体的にいつ、どのように成立し、展開、変容を経て画体による制作に移行したのかに関しての議論が、十分されてきたとは言い難い状況にあると言える。以上の問題点を踏まえ、本論文では、文献資料、現存作品と併せて考察し、筆様制作の成立過程とその展開について明らかにすることを研究の目的とした。その成立と発展を検討することで、室町時代における中国絵画の受容と変容の様相を解明する次第である。

第一章「室町水墨画における「様」の成立」では、「様」に対する解釈及び「筆様」の伝来と形成について説明する。第一節では、古代の「様」に対する解釈を考察する。主に中国各時代の字書、中国や日本の古典文献に記録された事例を整理し、「様」の意味を検討する。第二節では、日本に舶載された中国絵画の性格を分析し、水墨画の「様」の伝来と形成を考察する。主に室町時代の将軍家の財産目録、行幸記や御飾記及び禅僧たちの日記や詩文で記録された唐物に関する史料を分析し、十四、十五世紀において日本に請来された中国絵画の実態と日本人における中国人画家の認識を考察する。第三節では、筆様制作の成立における座敷飾りの影響について考察する。特に室町殿と東山殿の障子絵と飾り付けた中国絵画の関連性を検討し、筆様制作の成立と流行した原因を解明する。

第二章「如拙における「新様」による制作」では、室町初期の水墨画における「様」による制作について、十五世紀前半に活躍した如拙の「瓢鮎図」を中心に、作品の比較をおこなう。特に、序文に見える「新様」の語に注目し、「瓢鮎図」の制作事情やのちに流行した筆様制作との関係性を明らかにしていく。第一節では、序の「新様」に対する先行研究の理解を概観する。第二節では、史料上に「新様」と記録されている絵画作品をとりあげ、そこでは「新様」が何を意味しているかを考察する。第三節では、室町時代特有の作画のプロセスである筆様制作に着目し、「瓢鮎図」との関係性を解明する。

第三章「旧養徳院「山水図襖」における夏珪様の受容と変容」では、史料上に「夏珪様」と明記される唯一の現存作例である旧養徳院「山水図襖」四面に注目し、十五世紀後半の宗継による筆様制作のプロセスや夏珪様の受容と変容の様相を明らかにしていく。この問題を考えるため、第一節では、旧養徳院襖絵に対する先行研究を概観し、作品を概説する。第二節では、足利将軍家旧蔵の「夏珪国本」と称された作品の原像を探り、その性格を明らかにする。そして、「山水図襖」と現存する諸種の夏珪の山水画巻を比較し、その図様の由来を検討する。第三節では、芸阿弥を経由して受容された夏珪様に着目し、「山水図襖」との関係性を考察する。室町水墨画の制作における夏珪様受容の様相を解明し、夏珪様による制作における芸阿弥の役割を明らかにしたい。

第四章「「琴棋書画図」の系譜と馬遠様の受容」では、旧養徳院「琴棋書画図襖」八面に注目し、漢画「琴棋書画図」の図様の由来と成立過程について考察し、漢画人物図における馬遠様の受容を明らかにしたい。第一節では、「琴棋書画図」及び馬遠様の受容についての先行研究と関連史料を整理する。第二節では、文献資料や伝世作品などを取り上げ、中国における琴棋書画図様の定形化を検討し、漢画「琴棋書画図」の源泉を探る。第三節では、室町時代における「琴棋書画図」の展開について考察し、特に、宗継本、遮莫本と中国絵画を比較し、その図様の由来を探り、宗継における馬遠様の受容について検討することで、漢画系人物図の制作における馬遠様受容と変容の様相を解明しようとするものである。

第五章「室町時代における孫君沢に対する認識と受容」では、十五世紀から十六世紀半ばにかけての孫君沢に対する室町時代の認識と受容を考察し、日本水墨画史における君沢様の位置づけを明確にすることを目的とする。さらに、ほぼ夏珪様の受容の理解を中心に進んできた周文様式研究に一石を投じ、周文派における君沢様の受容の様相を明らかにしたい。これらを検討するにあたり、第一節では、史料上の孫君沢の記録をとりあげ、そこにみられる孫君沢に対する認識を検討する。第二節では、孫君沢の代表作品と伝承作品に着目し、君沢様の特徴を考察する。第三節では、室町時代の作品をとりあげ、孫君沢作品と比較し、室町時代における君沢様の受容について明らかにするうえで、筆様制作の展開と変化を論究する。第四節では、初期狩野派における孫君沢の受容を考察し、筆様制作から画体方式に移行する際に、君沢様の役割を解明する。

最後に終章として「筆様制作の展開と特質」において、筆様制作の成立と発展の様相をまとめ、その特質を述べる。そして、室町水墨画の画題と図様の系譜と変遷、地域性と時代性を考えたうえで、その絵画史上の意義を明らかにする。